

坂 尻 遺 跡

— 県営圃場整備事業広岡地区内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1 9 8 6

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は昭和60年5月15日から昭和61年2月28日まで実施した袋井市広岡字烏森3303-1番地に所在する坂尻（さかじり）遺跡の発掘調査報告書である。この委託契約の名称は「60県は広岡地区坂尻遺跡発掘調査委託」である。
2. 本調査は、静岡県中遠農材事務所長 大井良雄を委託者とし、袋井市長 湖東二郎を受託者とし静岡県教育委員会文化課の指導のもとに袋井市教育委員会が実施した。
3. 本調査に係る経費は農林水産省と文化庁との覚書きにより、圃場整備事業費から全体の72.5%を負担し、農民負担分27.5%については国県市の補助金でまかなった。
4. 発掘調査は吉岡伸夫、永井義博（袋井市教育委員会）が担当した。
5. 本書の執筆・編集は永井義博が行った。
6. 本書に使用した挿図のトレースは早川保子（遺構編）、寺田妙子（遺物編）が担当した。
7. 本調査、資料整理参加者は次のとおりである。（敬称略）
渡辺菊男、大橋庄一、川島良一、大庭嘉平、三浦久雄、佐藤好孝、大庭泰子
三浦とく江、寺田妙子、内山笑子、早川保子、白井洋子、深谷直子
8. 調査資料はすべて袋井市教育委員会で保管している。
9. 本調査に係る事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が担当した。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 地理的・歴史的環境	1
III 発掘調査の方法	2
IV 発掘調査の経過	2
V 調査体制	3
VI 遺 構	4
VII 遺 物	4
VIII まとめにかえて	5

挿 図 目 次

- 第 1 図 坂尻遺跡位置図
- 第 2 図 坂尻遺跡と発掘調査地点
- 第 3 図 発掘調査区全体図
- 第 4 図 北区第 1・2・3 面平面実測図
- 第 5 図 南区第 1・2・3 面平面実測図
- 第 6 図 出土遺物実測図

図 版 目 次

- 図版 1 (A) 発掘調査前(北より)
(B) 発掘調査前(南より)
- 図版 2 (A) 重機による盛土の除去作業
(B) 北区第 3 面発掘調査中
- 図版 3 (A) 北区第 1 面完掘写真
(B) 北区第 2 面完掘写真
- 図版 4 (A) 北区第 3 面完掘写真
(B) 北区西壁セクション
- 図版 5 (A) 南区第 2 面完掘写真
(B) 南区第 3 面完掘写真
- 図版 6 (A) 南区発掘調査中
(B) 旧東海道から見た調査地区

I 調査に至る経過

かつて石ノ形遺跡として登録されていた坂尻遺跡は一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査でその重要性を一般に示し、さらに周辺で実施された県道掛川袋井線道路改築工事に伴う発掘調査で遺跡範囲が原野谷川の自然堤防沿いにさらに南へ広がることを明確にした。このころ県道掛川袋井線（旧東海道）以南では県営圃場整備事業の対象として坂尻遺跡推定範囲内で事業が開始されていた。そこで袋井市教育委員会は事業主体者に文化財の取り扱いに関する説明と遺跡の保存に対しての要請に伺った。これに対して事業主体者の中遠農林事務所と広岡土地改良区は埋蔵文化財の保護に対して好意的であり工法的にできるだけ遺跡の包含層を破壊しないよう配慮していただいたが、支線25—1号道路の工事部分については破壊・消滅してしまうため残念ながら記録保存をすることとした。本書はこの工事対象部分の320㎡についての発掘調査報告書である。

II 地理的・歴史的環境

坂尻遺跡は、いままでの分布調査で想像することができないような河川の後背湿地にあたる水田の下より発見された複合遺跡である。

坂尻遺跡の位置としては可睡・油山丘陵（最高115.2m）の南東隅の段丘面から原野谷川の自然堤防に移るあたりの微高地上に位置している。そして掛川市八高山を源とする原野谷川は南流して坂尻遺跡北側の宇佐八幡神社付近でこの丘陵にぶつかり、その反動で遺跡中心部を大きく迂回するように流れすぐ南で逆川と合流するのである。坂尻遺跡の成立について静岡大学教授の加藤芳朗氏は『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財報告書 坂尻遺跡—自然科学編—1985—』の中で原野谷川より派生した小河川“古名栗川”の存在を報告している。そして加藤氏はこの古名栗川の旧流路と自然堤防によってもたらされた小礫層、砂礫層の上に坂尻遺跡が形成され、旧東海道ぞいの流路跡とともに生活面としてまた安定した交通路としてその役割りを果たしていたのであらうと推察されている。

坂尻遺跡は4世紀～7世紀にかけての古墳時代では安定した勢力をこの地で持っていた集落であった。これは先に述べたとおり地形の優位性、とりわけ原野谷川の引き起こす洪水の影響をムラがほとんど受けることがないというのが最大の理由である。北方の可睡・油山近陵上の各時期の墳墓、横穴はこの坂尻遺跡の“奥津城”となっているのであらう。

原野谷川のもたらす豊かな恵みをもとに栄えてきたムラは律令期に入ってもこの地方の中心的な存在であった。そして、さらに東西交通の拠点としての重要性が増してくるとともに、国1バイパスの調査で推定されるようになった「遠江国佐野郡衙」または「日根驛家」とされる官衙跡として脚光を浴びるのであった。

現在でも高台から望むと東名高速道路、国道1号線、東海道本線、東海道新幹線と日本経済の大動脈が集中する地帯である。

Ⅲ 発掘調査の方法

発掘調査は道路の増築工事のため短辺8m×長辺40mと南北に細長い調査区となった。さらに都合の悪いことに調査区中央に現在使用中の電柱とその支線が残されていたため調査区全体は通路で結ばれた北区と南区という砂時計のような形となってしまった。調査区の周囲は、すぐ東側には2階建ての民家が接し、南側には農業用水が、西側はちょうど摘み取り真っ最中の茶園があり、北側は掛川袋井線（旧東海道）の松並木があるという状況であった。このため最下層で1.50m以上の深さになる発掘調査区の壁は、かなりののり面をつけ、さらに民家側はシートをかけて崩壊を防いだ。

北区、南区共通の2m×2mの小グリットを設定してそれを基準に調査を行なった。グリット名は東西方向を西よりA、B、C、Dとし、南北方向は北より、1、2、3、4……とした。そしてアルファベットと数字の交差によりグリット名とした。（例＝A—1、A—2……）

現地作成図は基本的に1/20とし微細図は1/10または1/5とし、地区全体図等は1/40とした。

発掘調査はまず農道盛土と茶園耕作土を重機で排除して、遺構面直土から作業員による手作業の発掘調査にきりかえた。周囲は土砂のくずれを防止するため土止め用のコンパネを張り、その内側に幅50cm、深さ50cmの排水溝を設け、調査区端に集水ますを設置し水中ポンプを作動するようにした。また排土効率を上げるため動力エンジンとベルトコンベアーを用意した。

写真撮影は、中型カメラ（マミヤRB 6×7）、小型カメラ（ニコンF、ニコンFE）を使用した。写真撮影には脚立、ローリングタワーを使用した。

Ⅳ 発掘調査の経過

昭和60年5月21日

本日より発掘調査を開始予定であったが雨天のため明日に順延。

5月22日

調査開始。重機により盛土の排土開始。集水ますを先行して掘ると盛土が約1m、そして耕作土の下に約60cmの厚さで遺物包含層があるもようである。器材の搬入や仮設トイレの設置もおこなわれている。発電機、ベルコンも到着する。盛土の土質がきわめて悪く壁の勾配を多くとるとともに電柱の周囲はかなり土を残すこととした。

5月23日

重機で掘削。土止めの工事。集水ますの整備。遺物包含層直土の土から須恵器、土師器の破片が出土する。

5月24日～25日

雨で外業は中止。出土品の整理。実測図の清書等をおこなう。

5月27日

雨のため民家脇の壁に亀裂が入る。シートをかけて応急処置をとる。

5月28日

北区第1面の精査でPitを検出。土師器・須恵器も出土。

5月29日

雨天で外業は中止。出土品、図面等の整理作業。

5月31日～6月1日

北区は第1面。南区は第1面に遺構がなく2面の発掘をそれぞれ行なう。写真撮影や実測図作成も次々におこなわれていく。

6月3日～4日

北区、南区もそれぞれ次の面の調査。溝状遺構、Pit等の検出。

6月5日

北区、南区も実測と写真である。小さな遺構は多いが遺物は少ない。

6月6日

北区は実測のつづき。南区は掘り下げ無遺物層に至る。

6月7日

各区とも最終面になるのが遺物が少ない。

6月8日

雨天のため休み。出土品整理、

6月10日～15日

四方の壁のセクション図を作成する。

V 調 査 体 制

◎調査計画

中遠農林事務所

◎調査指導

静岡県教育委員会 文化課

◎調査主体

袋井教育委員会

教 育 長

鈴 木 勲 一

社会教育課

課長兼文財係長

金 原 久 雄

学 芸 員

吉 岡 伸 夫（発掘調査担当者）

学 芸 員

永 井 義 博（発掘調査担当者）

学 芸 員

松 井 一 明

VI 遺 構

今回の発掘調査で検出された遺構は竪穴状遺構（S I）、溝状遺構（S K）、土壇（S K）Pit（記号なし）がある。残念ながら住居跡や掘立柱建築物跡等の直接的に文化の痕跡を残す遺構は発見されなかったが第4図、第5図で見られるとおりその一部分を見ることはできる。

〔北区の遺構〕

第1面は2つのPit列、①—②—③、④—⑤—⑦と土壇S K 1 が検出された。Pit列は柱穴にしては少さすぎるので柵列のようなものであろうか。中世の遺物が比較的多い面であるが土師器、須恵器も出土している、S K 1 からは遺物が出土していない。

第2面は東西にはしる溝状遺構S D 1～S D 9 が特徴的である、その他Pitや土壇、竪穴状遺構の一部が検出されているがその全容はつかめていない。

第3面になると溝状遺構はなくなり竪穴状遺構、土壇、Pit の組み合わせになる。このあたりが遺物の包含層としても厚く出土量も多い。古墳時代の生活面であろう。

〔南区の遺構〕

第1面では遺構は検出されていない。

第2面は溝状遺構（S D 10、S D 11）とPit（29～50）が検出された。しかし、調査面積が狭いため掘立柱建築物跡等の組み合わせは確認できなかった。

第3面は溝状遺構（S D 12）とPit（51～69）が検出された。Pit は第2面の遺構の残りの部分も含まれている。

遺構については県道掛川袋井線（旧東海道）の北に比べてはるかに少なくなるようである。Pit なども柱穴と考えるには小さな遺構が多く施設としてのまとまりも見られない。遺跡としての南限が近づいているのであろうか。

VII 遺 物

今回の調査で出土した遺物は第6図に示した。遺物量としてはテンバコ5箱と調査面積からするとかなりの量であったが、土器の胴部破片や磨耗のすすんだ遺物が多く小片33点を図示した。このうち土師器11点、須恵器20点、陶質土器2点である。時期的には古墳時代の遺物が多く、他に奈良・平安時代や中世の遺物もあるが、原野谷川左岸の掛川市内の原川遺跡、梅橋遺跡で出土しているような弥生土器は発見されていない。なお、中心線1点鎖線の図は回転復元である。

〔土師器 第6図1～11〕

11点の土師器のうち完形品は1点もない。包含層からの出土量は比較的多かったが図化できたものはこれだけである。遺構からの出土品も見当たらない。1～4は口径10～12cm、器高4.5cm前後の坏身である。内面・外面の調整は剥落がはげしく不明である。5は高坏の脚部で

あるがいたみが激しい。6は甕の口縁部破片で推定復元口径20cmである。口縁部はヨコナデで仕上げられている。7は把手付鉢の1/4個体の破片である。調整等は不明である。8～11壺、甕鉢等の種々の把手である。

〔須恵器 第6図12～31〕

この中ではNo22がPit47から出土しているのみでその他は包含層中からである。12～23は坏蓋である。24は坏身、25、26は高台付の坏身である。27は台付壺の脚部、28は長頸壺の口縁部と思われる。30、31は壺の口縁である。

〔陶質土器 第6図32、33〕

32の小皿は灯明皿で、口径8.5cm、器高2cmを計る。33は山茶碗の底部である。

図化した遺物の出土土層位は次のとおりである。北区耕作土下(24)、北区第2層(14、31) 北区第3層(13、15、18)、北区その他の遺物(4、7、10、18、19、23、29、30) 南区耕作土下—第1層—(3、11)、北区第2層(2、6、17、20、21、27、30)、北区第3層(9、12、25、26)、南区第4層(1、5、8、28)、南区Pit47(22)以上である。

VIII まとめにかえて

国道1号線袋井バイパスに関連する発掘調査で坂尻遺跡はその骨格を見せた。そして周辺部の発掘調査(大庭塗装工業所北原川作業所建設予定地内発掘調査、メロン栽培用温室増築予定地内調査、県道掛川袋井線道路改築工事用地内調査)によって古名栗川の旧流路と旧自然堤防とのかかわりが次々に証明されていった。今回の調査では、はじめて県道掛川袋井線(旧東海道)の南側に調査のメスが入れられたことになる。このあたりは国本交差点から旧東海道までの間をかつて前田庄一氏が調査し報告している。この中では坂尻遺跡がさらに南に広がることを指摘していた。

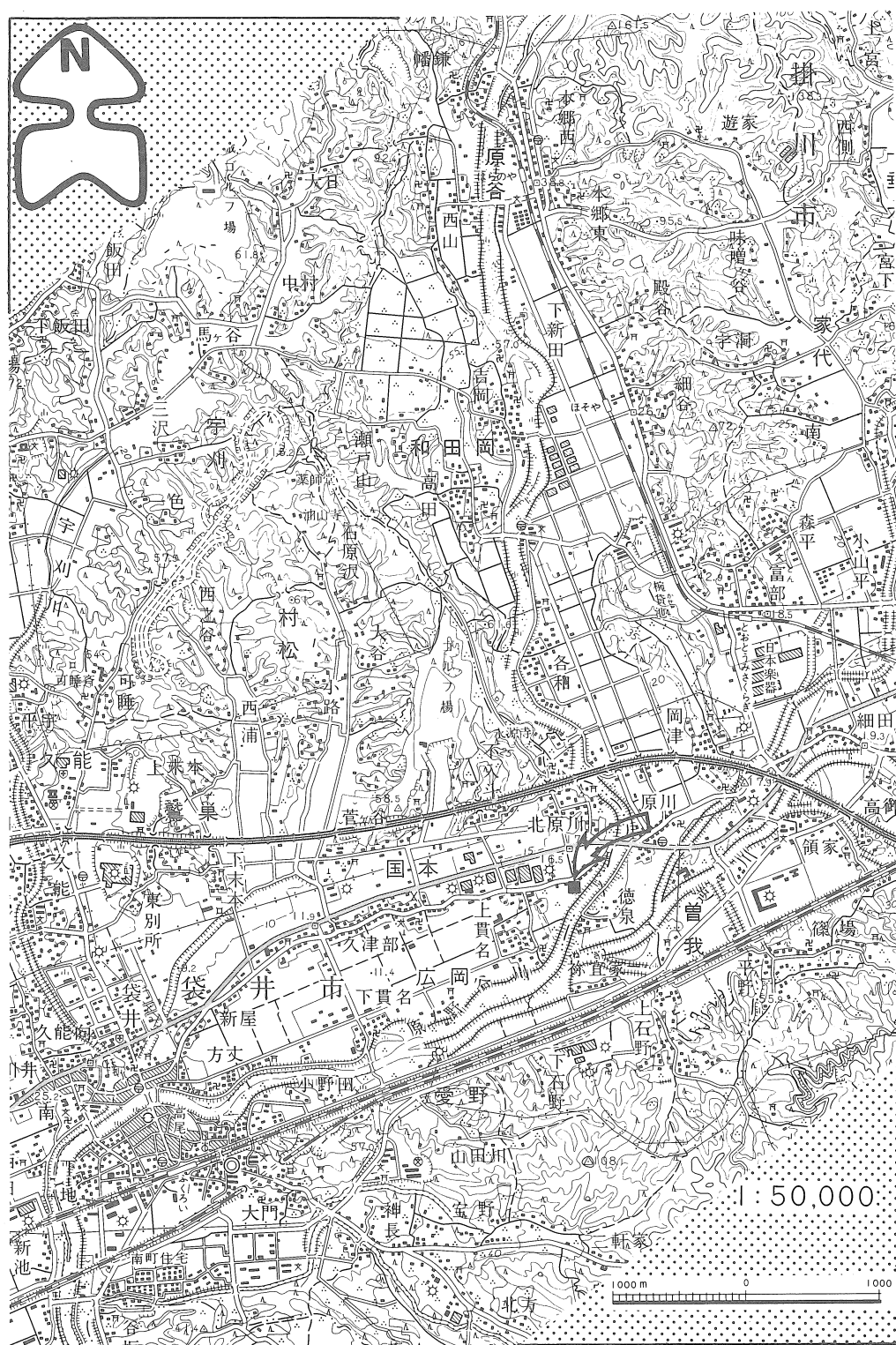
- ① 古墳時代の遺構、遺物は坂尻遺跡の中心地に比較するとかなり希薄になってはいるが、まだまだ南へそして西へ伸びていることが想定できる。
- ② 律令期の遺構と断定できるものは少なかったが、遺物は若干出土する。しかし、坏等も少破片が多く、また墨書土器や金属製品、セット関係のつかめる遺構、遺物などが出土していないことなどから、たとえ今回の発掘面積が狭いとはいえ距離的にも官衙の中核をかなり離れたことが推察できる。

- ③ 中世、近世の遺物も若干出土する。県道掛川袋井線(旧東海道)の下を流れた旧原野谷川の流路・自然堤防上はこの間ずっと東西交通の要所として機能していたと考えられる。

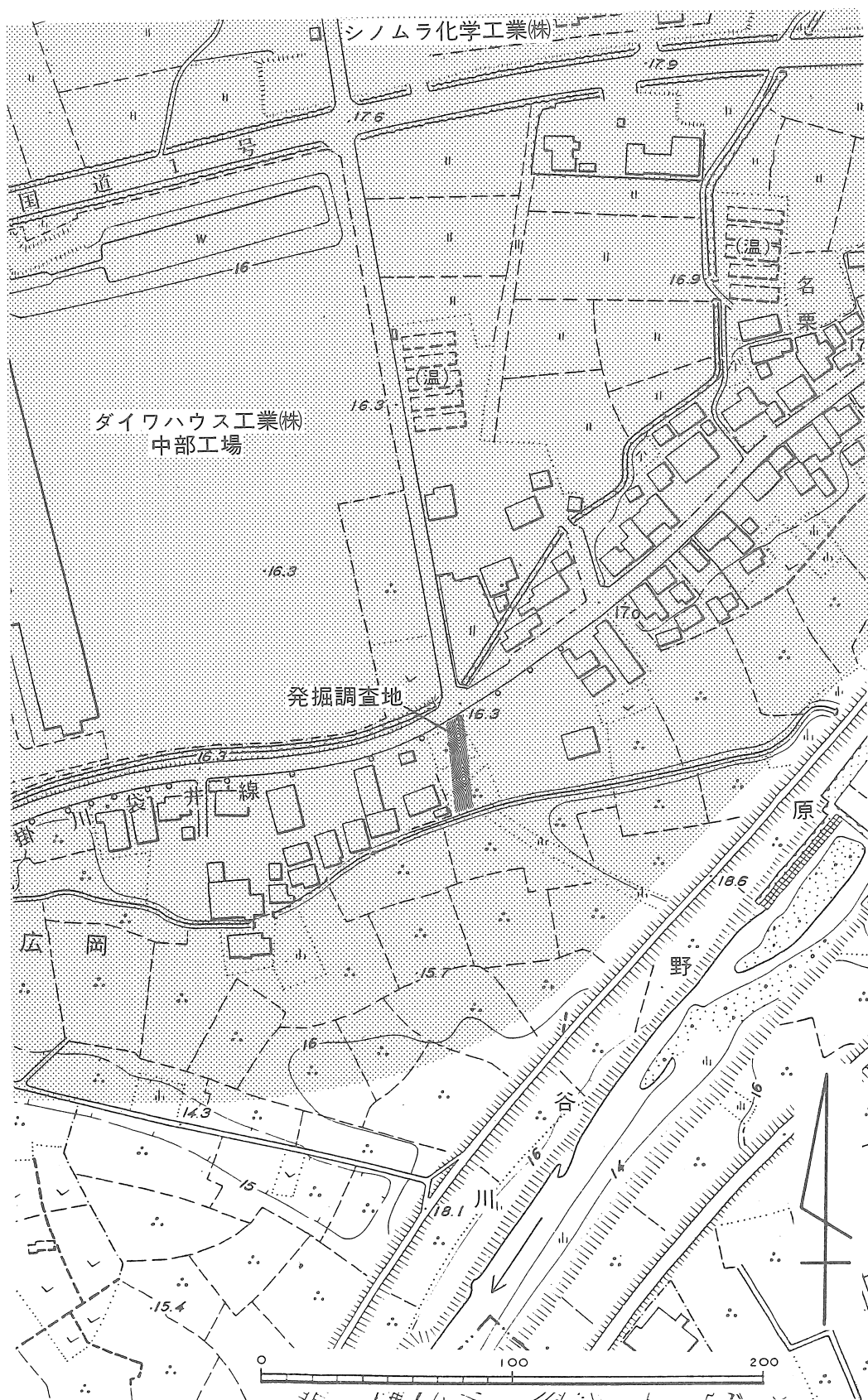
今回の調査は坂尻遺跡を考えるうえで、国1バイパスの調査で推測されたことがらを補強する結果を導びき出した重要な調査であった。坂尻遺跡の遺物等については国1バイパスの発掘調査報告書に詳しい考察が述べられているらしいので機会があったらそちらを見ていただきたい。文末になりましたが本調査に係り内外の多くの方々の協力を得て本調査、及び報告書の作成がされた。みなさまに心から感謝いたします。(袋井市教育委員会 永井義博)

挿

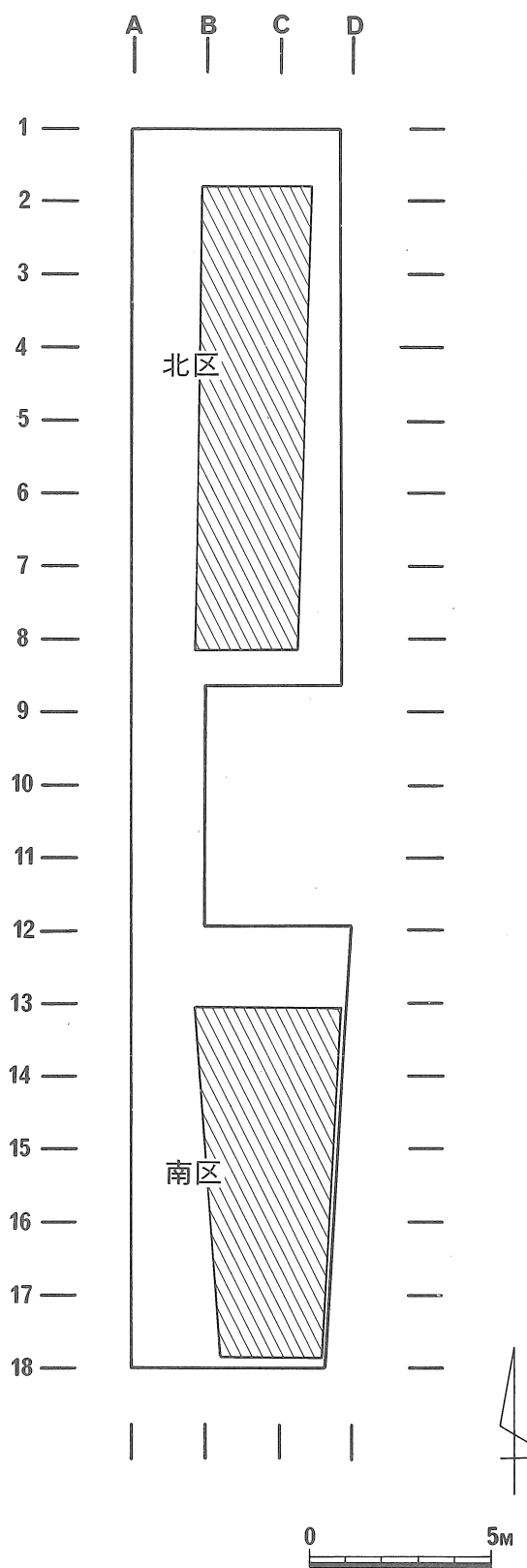
図



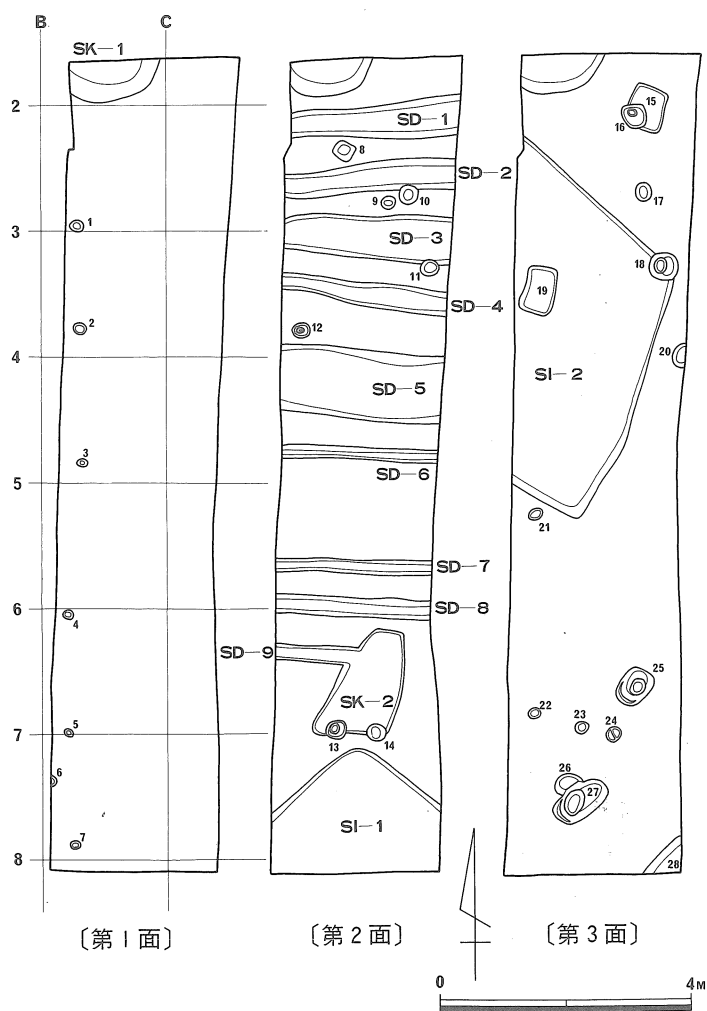
第1図 坂尻遺跡位置図(矢印が調査地点)



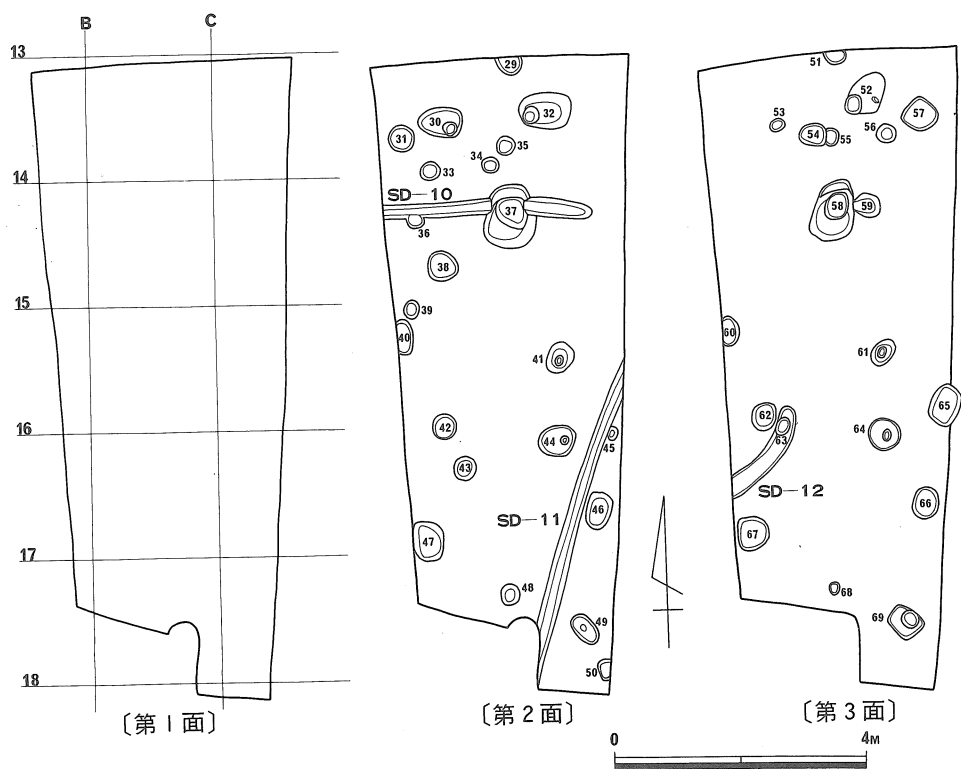
第2図 坂尻遺跡と発掘調査地点（遺跡範囲は推定）



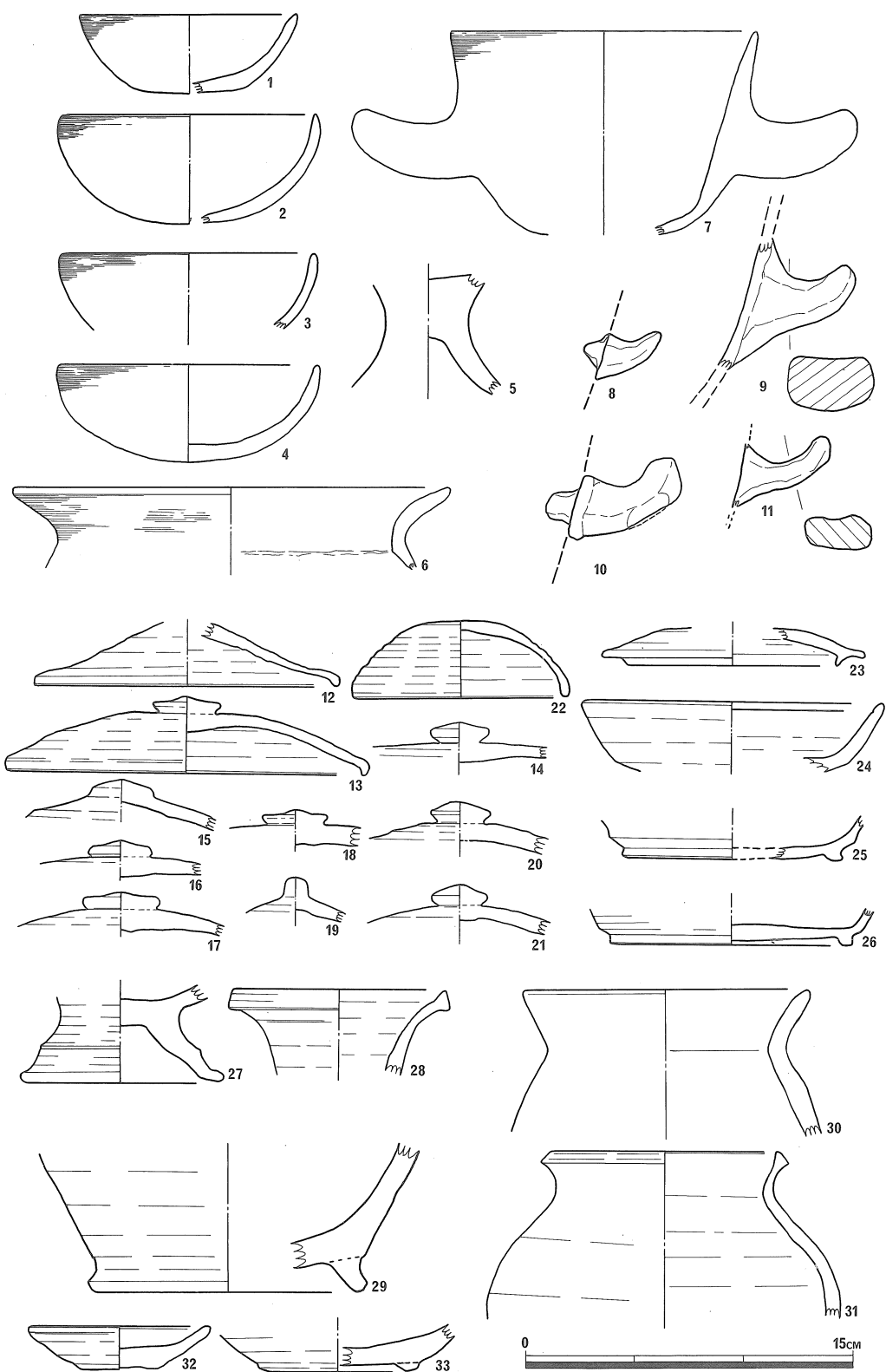
第3図 発掘調査区全体図（斜線が平面調査）



第4图 北区第1・2・3面平面实测图



第5图 南区第1・2・3面平面实测图

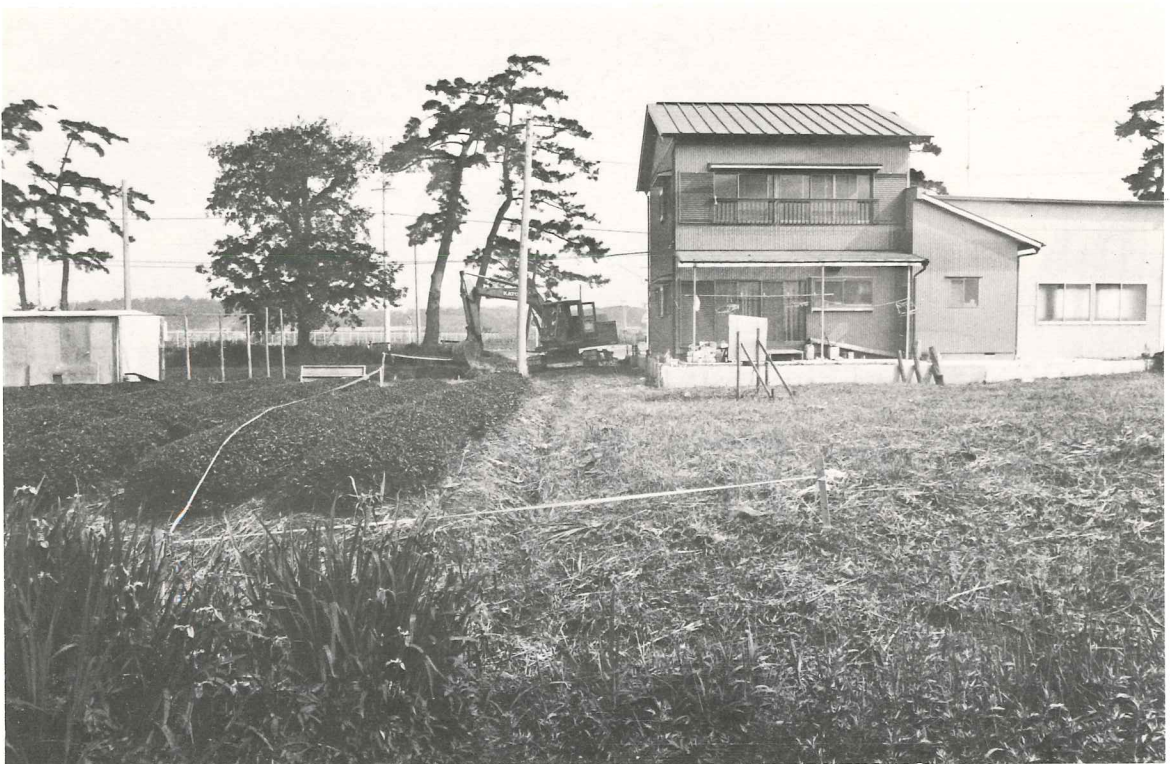


第 6 图 出土遺物実測図

写真図版



(A) 発掘調査前（北より）



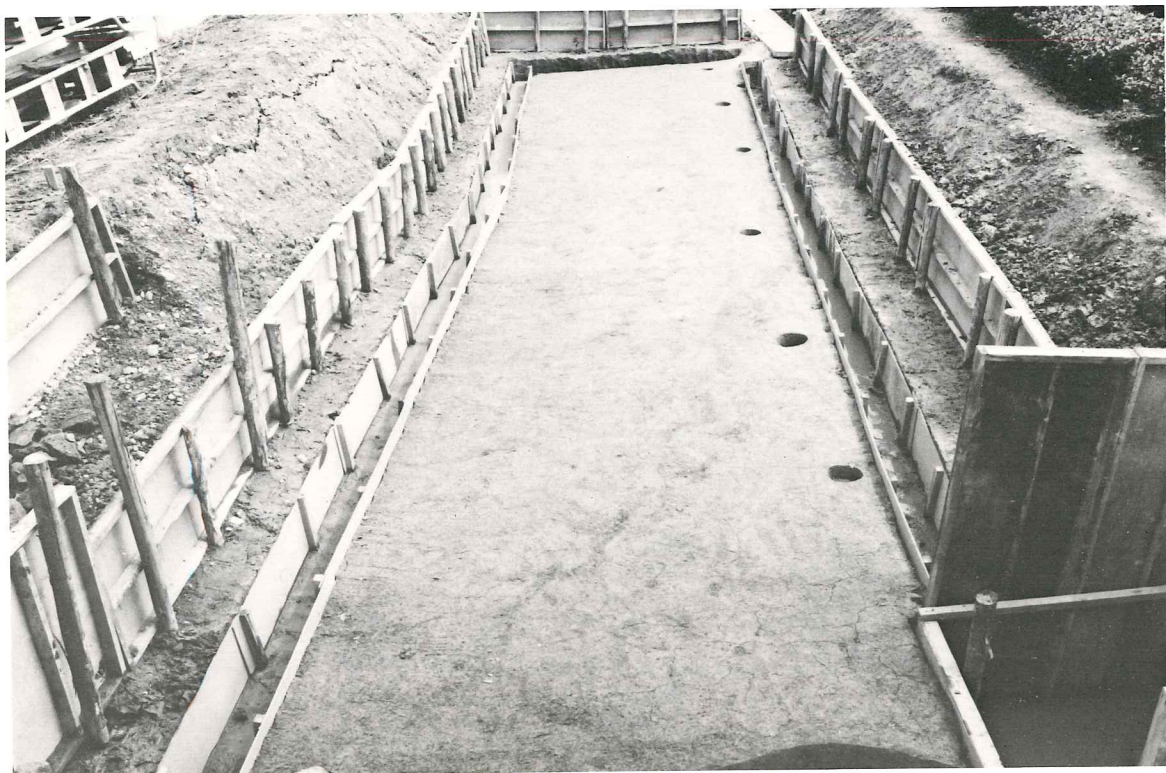
(B) 発掘調査前（南より）



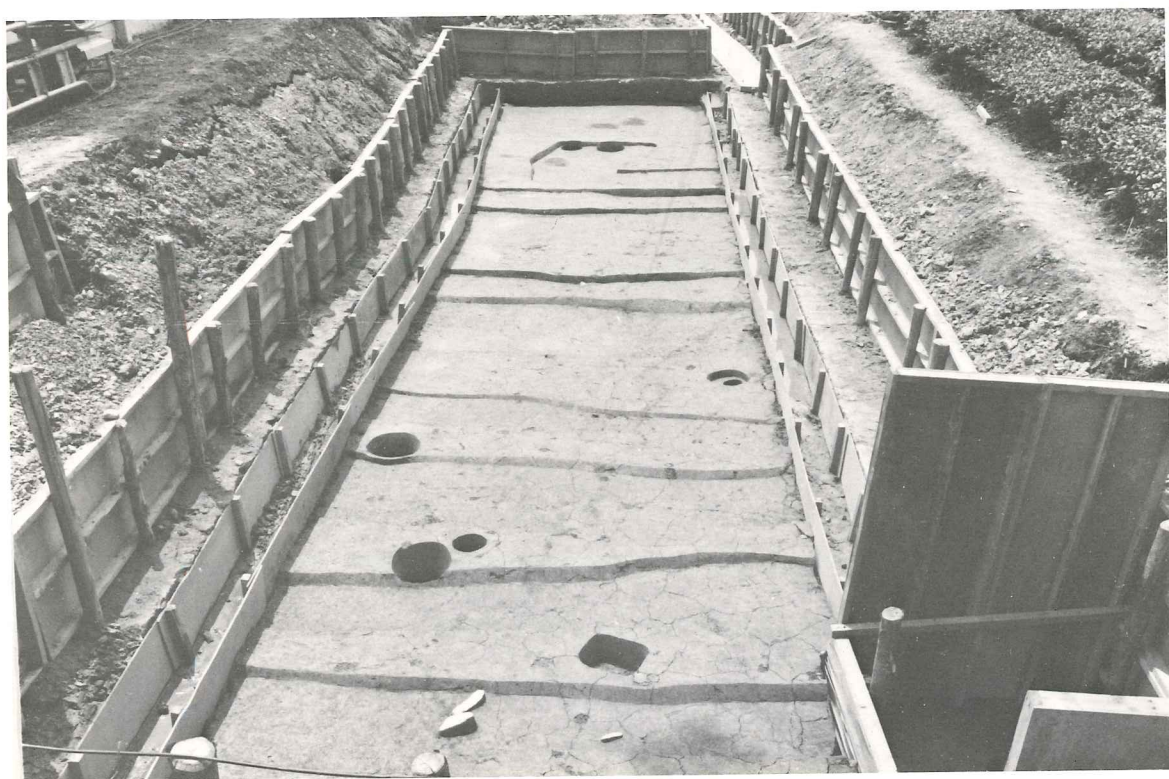
(A) 重機による盛土の除去作業



(B) 北区第3面発掘調査中

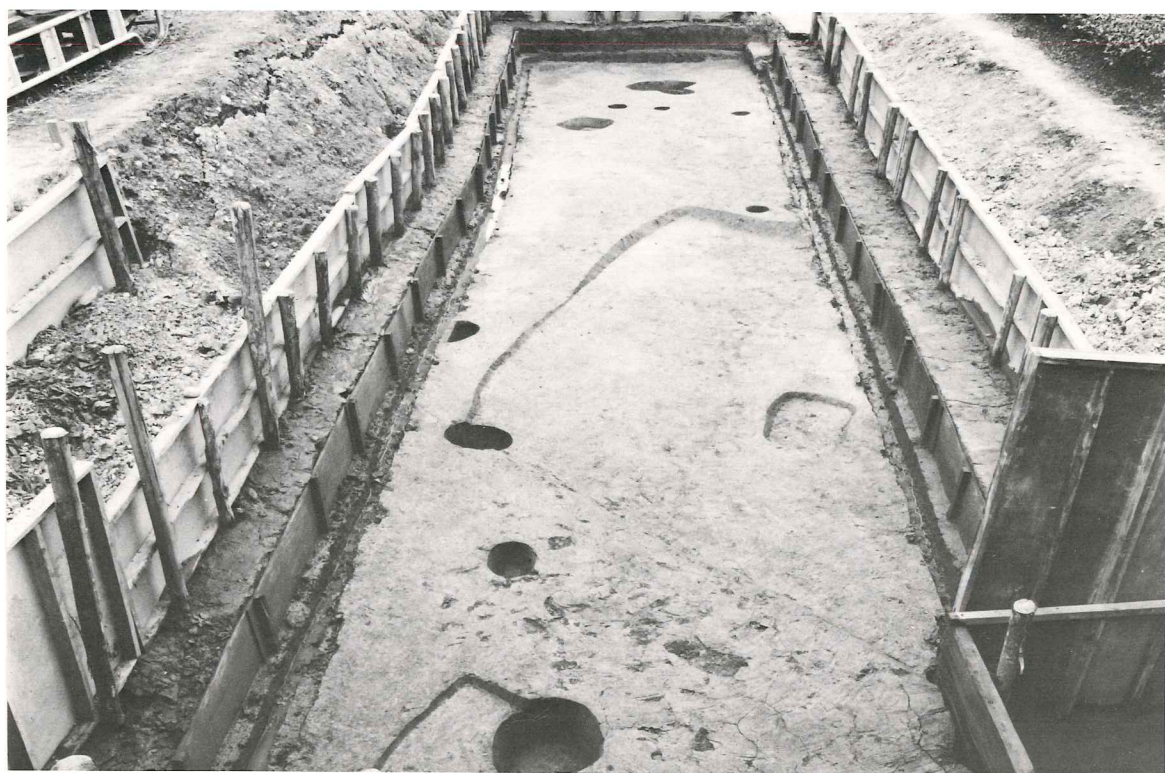


(A) 北区第1面完掘写真



(B) 北区第2面完掘写真

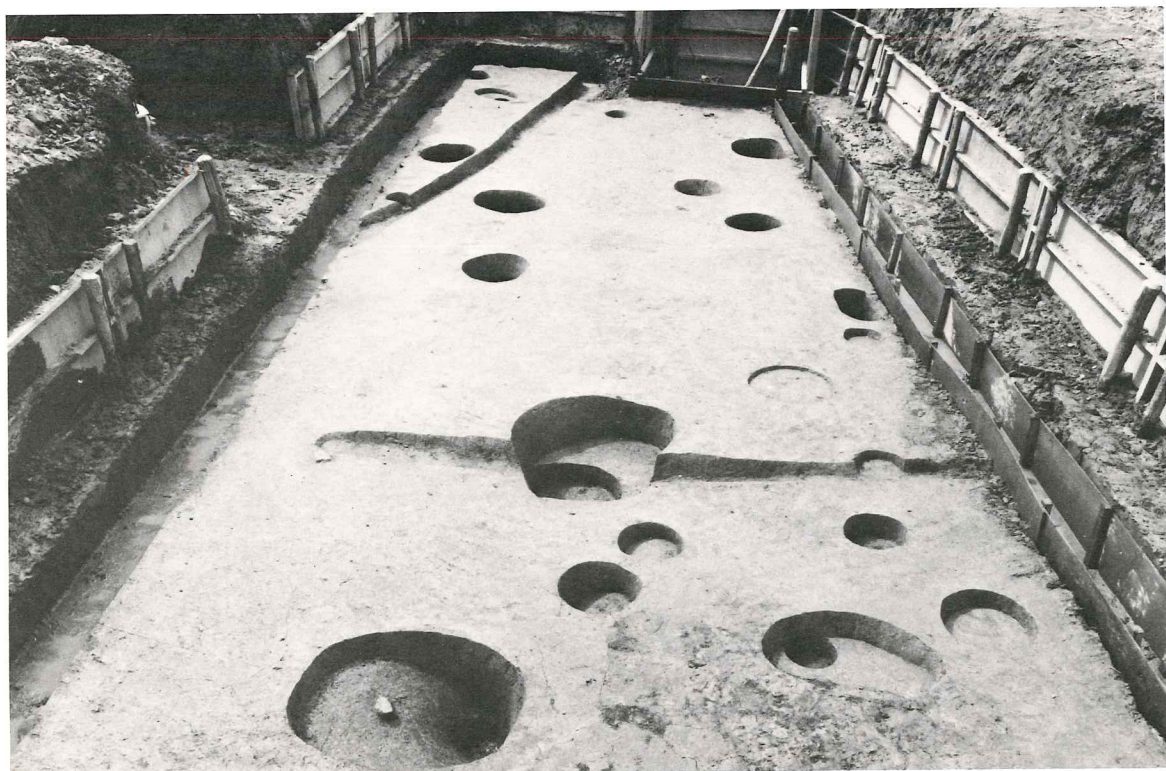
図版 4



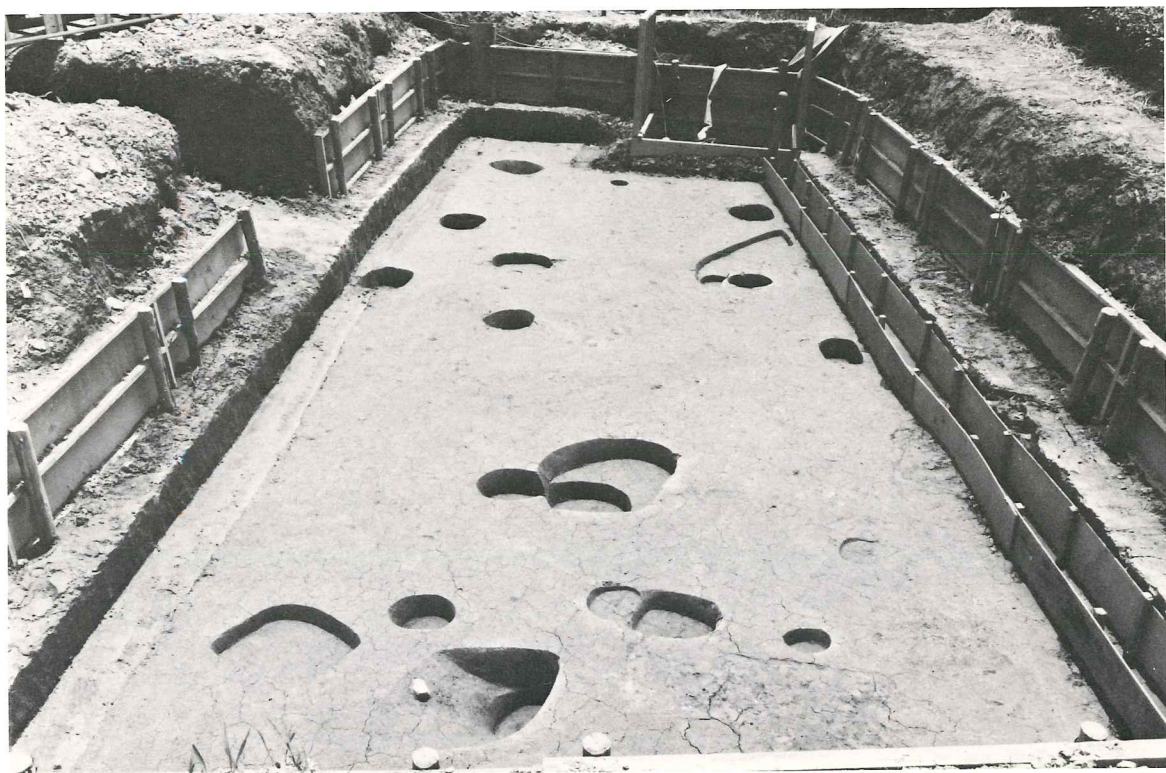
(A) 北区第3面完掘写真



(B) 北区西壁セクション



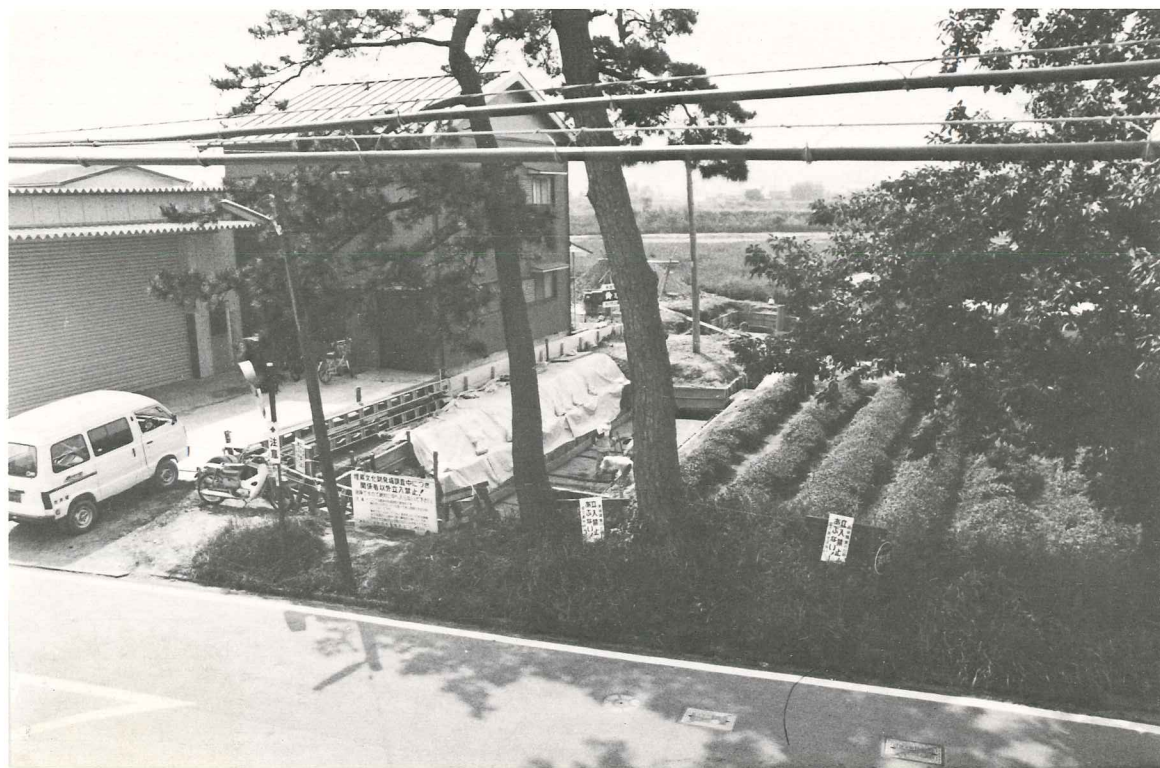
(A) 南区第2面完掘写真



(B) 南区第3面完掘写真



(A) 南区発掘調査中



(B) 旧東海道から見た調査地区

坂 尻 遺 跡

(県営圃場整備事業広岡地区内)
(埋蔵文化財発掘調査報告書)

1986年 2 月 25 日

編 集 静岡県袋井市教育委員会©

袋 井 市 国 本 3 0 7 0 - 1

T E L 0 5 3 8 4 (3) 2 1 1 1

印 刷 株式会社 開 明 堂

浜 松 市 中 沢 町 1 番 1 号